



鳩の糞による感染症防止のためベランダを取り付けずシンプルな構造としている

院内感染対策と患者の役に立つIT化の採用で 大隅半島に安心できる循環器医療環境を提供する。

かつて医療過疎地域と呼ばれた地に24時間・365日対応可能な循環器専門の施設を開設。外観のシンプルさとは裏腹に、建物内には様々な院内感染対策を施し、安心・安全な医療を提供。治療成績など情報公開を積極的に行い、患者が納得できる医療を提供し、「地域とともに生きる病院」を目指す。



鹿屋ハートセンター

所在地：鹿児島県鹿屋市札元2-3746-8

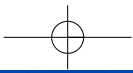
[病院DATA]
標榜科目：循環器科、内科
病床数：19床

[建築概要]
工期：200●年●月～2006年10月
構造規模：鉄筋造・地上3
延べ床面積：2056㎡
設計監理：
施工：戸田建設

鹿屋ハートセンターにはベランダはなく、名称の看板はプラスチックの文字板を貼り付けただけのシンプルな外観となっている。

最近の病院建築は、デザイン性の高い建物が多い。そうした傾向の中、シンプルな外観にした理由について、院長の新井英和氏はつぎのように語る。

「理由は2つあります。ひとつは、入院患者さんにとって重大な感染症を起こす可能性のあるハトの巣を作らせないためです。もうひとつの理由はコストです。デザインにコストをかけるより



院長に聞く。

新井英和院長

医療過疎と呼ばれた地で 高規格医療機関の経営を実践

私が鹿屋市を訪れたのは、1999年のことです。当時私が知る限りでは、47都道府県の中で人口第2位の都市でカテーテル治療ができない都市は鹿屋市だけでした。

都市部と同じだけの税金や保険料を支払いながら、都市部の数倍にもなる死亡率に甘んじなければならないこの地を私は放置できないと思い、鹿屋市を

じめとする大隅半島内の心臓血管病に24時間・365日対応する医療機関を設立したのです。

また私は、僻地といってもよい地域で「高規格の医療機関の経営は可能か」というテーマを実証することも設立の目的でした。高規格医療機関、つまり徹底した院内感染対策と、高度医療機器や電子カルテ、PACSなどを装備した医療機関が僻地でも

経営が可能であることを実証し、全国に広め医療の地域格差をなくしたいと考えたからです。

鹿屋ハートセンターの施工にあたり、戸田建設のネットワーク設計担当者、院内感染対策のエキスパートの方と直接打合せをし、具体的な提案をいただき、「患者のためになる科学的な根拠を持った建築」ができたと思っています。

は、院内感染対策と施設のIT化のためにお金を使うというのが鹿屋ハートセンターのポリシーです」

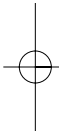
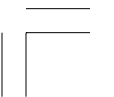
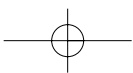
掃除がしやすい院内設計

院内感染対策を重視するということの基本としたのは、「掃除がしやすい」というコンセプトのもとでの設計である。その主な例としてつぎの3つが挙げられる。

1つ目は、床材。床材は、可塑性に優れたものを使用している。そのため床から壁面への立ち上げは曲面にできる。床と壁面の角は曲面となっているので、埃だまりが軽減されることとなる。またこの床材は、単層構造、耐摩耗性スルーパターン構造になっているため、ワックス処理が不要で、壁面の耐衝撃性にも優れている。

2つ目はトイレ。医療機関ではトイレの清潔さは重要である。

鹿屋ハートセンターでは清掃は職員自らが毎日行っているが、清掃の効率化を考えて壁掛け型の便器を採用している。床面に便器の立ち上がり部分がないことで簡単に隅々まで清掃ができるようになった。





- ① 病室には埃が見やすいように高さを低くした家具を設置
- ② 掃除がしやすいように壁掛けのトイレを採用
- ③ 最新の冠動脈対応マルチスライスCT
- ④ 重篤な心疾患にも対応可能な最先端のアンギオ装置
- ⑤ IT化により効率化されているナースステーション

本来、医療機関が
備えておくべき機能だけに
集約した設計

3つ目は洗面台。通常の洗面台にはオーバーフローという水があふれないための穴がついている。しかし、オーバーフローの中は、カビを生む温床となり、緑膿菌の感染源となることも少なくない。

こうしたことを踏まえ、ハートセンターではオーバーフローをなくして自動水栓の洗面台を標準仕様としている。この仕様の洗面台を各病室に1台ずつ設置し、各部屋で1行為1手洗いの環境を整えている。

人に優しい医療のためのIT化

院内感染対策と並ぶ重点ポイント1は、院内のIT化である。医療の質を落とさずに業務の効率化をはかり、さらにコストを抑える方法として、電子カルテや画像ネットワークシステムを導入し、徹底したIT化を行っている。

また患者やその家族に冠動脈の狭窄部などの画像や検査データを見せながら説明をすることで、患者が納得できる情報を提供している。

ITを利用することで、質の高くて患者に優しい医療の実現を目指している。